

令和元年5月30日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K13431

研究課題名(和文) 明末清初の商業出版における同族書坊の広域的経営の実態の研究

研究課題名(英文) A Study on the wide-area management of publishers owned by same clan in the late Ming and early Qing periods

研究代表者

上原 究一 (UEHARA, Kyuichi)

東京大学・東洋文化研究所・准教授

研究者番号：30757802

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)： 明末清初の同族書坊の広域的経営の実例として、太末(浙江衢州)の舒氏の一族が南京と蘇州で出版活動を行っていたことが確かめられた。

更に、杭州の容与堂という書坊の活動状況についての考察を進めた。
また、長らく中国国家図書館蔵本以外の伝存が確認されず、その影印本が一度も刊行されなかったこともあって、全貌の把握が容易ではない状態が続いてきた石渠閣補刻本『忠義水滸傳』の新たな伝本が発見されたため、両伝本の詳細を調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明末清初には研究代表者がこれまでに明らかにした異姓書坊間の広域的連携のほかに、同族書坊の広域的経営にも複数の実例があると確かめられたことで、明代中期以降の商業出版の爆発的な隆盛がどのようにもたらされたかについての解明が進んだ。

また、容与堂の活動実態について研究を進めたことと、石渠閣補刻本『忠義水滸傳』の新たな伝本の発見とその詳細な調査によって、白話章回小説の中でも最初期の作品にして最高傑作のひとつでもある『水滸傳』の初期の版本の様相についての知見が深まった。

研究成果の概要(英文)： As an example of the wide-area management of publishers owned by same clan in the late Ming and early Qing periods, it was confirmed that Shu clan of Taimo(Zhejiang Quzhou) had been publishing in Nanjing and Suzhou.

Moreover, I proceeded to consider the publishing activities of Rongyutang, a publisher in Hangzhou.

In addition, the whole picture surrounding The Stone Canal Pavilion Printing House repaired edition of Zhongyi Shuihu Zhuan remains unclear to this day as the edition has yet to be verified by any entity outside of the National Library of China, and a facsimile edition has never been released. However, a new, previously unknown copy was discovered. So I investigated the details of two copies.

研究分野：中国古典文学・書誌学

キーワード：中国文学 書誌学 書坊 出版文化 商業出版 覆刻・翻刻 版本 章回小説

1. 研究開始当初の背景

前近代における中国の商業出版の実態については、同族の書坊が時には同一地域で、時には離れた地域で、互いに連携しながら出版活動を行っていた形跡が、清代中期の白話小説『儒林外史』の描写などから周知されていた。一方、異姓書坊間の連絡の事例は殆ど知られていなかった。そのような状況下で、研究代表者は平成 27～28 年度科学研究費研究活動スタート支援「明末清初における異姓書坊間の広域的連携の研究——覆刻・翻刻を手掛かりに——」(15H06238)の成果の一部である上原究一「明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について」(『東方学』第 131 輯、2016)において、明末清初の商業出版の 2 大中心地であった金陵(南京)と建陽をそれぞれ拠点とする、江西金谿出身の唐氏・周氏と、建陽出身の余氏という、互いに同族ではない書坊の間で、相手方の了解を得た上で相手の刊本を覆刻ないし翻刻しているとししか考えられない事例が多々見られることを指摘して、明末には異姓書坊間の広域的な提携関係があったことを明らかにした。また、同族書坊の経営の実態に関しては、上記研究課題を遂行する過程、及びそれ以前から金陵の唐氏や周氏、建陽の余氏などの書坊の歴代主人についてそれぞれ個別に考察を進めてきた結果として、周氏大業堂や余氏萃慶堂のように特定の血統が代々同じ書坊名を世襲していくという直感的に理解しやすい状況の他に、周氏万巻楼のように同族内で広く書坊名を共有する場合もあることも分かっていた。

その一方で、明末清初における同族書坊による広域的経営の実例は、前述の金陵周氏万巻楼の一族で、万暦後期に金陵万巻楼名義での出版を度々手掛けている周文燿(号如泉)が天啓年間以降には金閶(蘇州)大業堂名義で出版を行っていることや、その兄の周文煒(号如山)やその子孫筋が金陵で大業堂主人として刻書活動を行っていたことが判明してはいたものの、先行研究でその存在が半ば自明のものと見られている割には、確かな実例はそれほど多く知られている訳ではないことが研究の過程で浮かび上がってきた。

更に、2016 年 9 月に行った口頭発表(上原究一「関于容与堂刊本小説、戯曲」, 国際シンポジウム「中国古典小説 30 年の回顧と展望」第 1 分科会、神奈川大学横浜キャンパス)において、研究代表者は万暦後期の白話小説 1 種と戯曲 5 種しか刊行物が残っていない(6 種とも「李卓吾先生批評」と銘打つ)ものの、それぞれの作品(特に白話小説『水滸伝』)の重要版本の刊行者として名高い杭州の容与堂という書坊について、その 6 種全てに覆刻本が現存していて、甚だしくは複数の異なる版による覆刻本を持つ戯曲までであることを指摘していた。これらの覆刻本は全て、刊行者の名は容与堂しか見えない。これが容与堂が杭州で何度も版木を作り直したということなのか、或いは同時期に複数の地域で自らの刊本を販売するために各地で版木を作ったのか、それとも異姓書坊との広域的連携の産物であったのかは、その時点では手掛かりが乏しく判然としておらず、容与堂の主人の姓さえ分かっていなかった。

2. 研究の目的

以上の経緯を踏まえ、本研究においては、明末清初に異なる地域で活動している同姓の書坊による刊本を可能な限り多く調査して、それぞれの活動時期や主人についての情報を収集・分析することを通じて、明末清初の時期に周文燿のように同一人物が異なる地域で出版活動を行っている事例や、周文煒と周文燿の兄弟のように同族同士が同時期に異なる地域で出版活動を行っている事例がどの程度認められるのかを把握することを目的とした。

更に、そのような事例があった場合には、その書坊が自らの刊本を覆刻して別の地域でも売るといったことがあったのか、或いはある地域で作った版木で刷った本を別の地域に持って行って売るといったことがあったのかを調べ、容与堂の刊本に全て覆刻本が存在するという上記の状況が生じた背景にも迫ることも目指した。

3. 研究の方法

明末清初の出版をめぐる先行研究では、かつて示された推測が確たる論証を経ないまま定説化してしまっている事例が間々あったり、誤解に基づく著録がまかり通っていたり(例えば、用例からは明らかに「○○(年号)年間のある年の刊行」という意味でしかない「○○新歳刊」が「○○元年の刊行」という意味であるとの誤解に基づいて刊年を著録している目録は非常に多い)するため、先行研究・工具書・既存の目録などの著録をそのまま鵜呑みにして机上で研究を進めると誤解に誤解を重ねてしまう可能性が高く、関連する版本は極力原本を閲覧して、刊行者や刊年や刊行地についての情報を一定の確たる基準の下に確認する作業が欠かせない。

そのような状況下において本研究の目的を達するためには、明末清初に複数の地域で書坊を営んでいたことが確認出来る姓(具体的には、建陽・南京の劉氏や、建陽・南京・蘇州の葉氏など)の書坊が各地で実際にどのような体制で出版活動を行っていたかについて、日本・中国・台湾を中心とする各地の所蔵機関に収められたそれぞれの刊本をなるべく網羅的に調査することを通して把握する必要がある。その上で、複数の地域で刊行されている書物(コンテンツ)について、それぞれの刊本の複写物を入手して細かく比較対照し、それが覆刻か、覆刻に近い翻刻か、版面の様相を一新した翻刻か、本文を大きく改変した翻刻か、或いは同版なのかを究明した上で、そうした作業が同族による広域的経営の産物なのか、或いは異姓書坊間の広域的連携の産物なのか、それとも書坊間の協力ではなく競争の産物なのか、といった問題を考察していく。

4. 研究成果

(1) 明末清初に複数の地域で書坊を営んでいたことが確認出来る姓のうち、計画段階で注目していた劉氏や葉氏については、研究期間内には異なる地域の同姓書坊同士が同族なのか否かについての確たる根拠を見出すことが出来なかった。しかし、計画段階では特に注意していなかった姓である舒氏について、上原究一「いわゆる舒載陽本『封神演義』の刊行者について」(『山梨大学国語・国文と国語教育』第22号、2018)において、明末清初に南京と蘇州で出版活動を行っていたのがいずれも太末(浙江衢州)の舒氏であること、その一員と思しき舒文河(冲甫)という人物が南京と蘇州の両方で出版活動を行っていたこと、舒文河と兄弟か堂兄弟と思しき名を持つ舒文淵(載陽)が南京で出版活動を行う他に杭州で作られた版木を入手していたことなどを明らかにすることが出来た。なお、従来刊行者について議論があった国立公文書館内閣文庫所蔵の『封神演義』の現存最古の版本について、舒文淵(載陽)と舒文河(冲甫)という同族と思われる二人による共同出版であったと考えるべきことを示せたのもこの論文の大きな成果である。

(2) 研究の出発点のひとつとなった杭州の容与堂の刊本については、まず1.で前述した口頭発表の成果を、上原究一「虎林容与堂の小説・戯曲刊本とその覆刻本について」(『中国古典小説研究の未来—21世紀への回顧と展望』所収、勉誠出版、2018)という論文をまとめた。

更に、その後の調査によって、容与堂の5種の戯曲刊本のうち、『李卓吾先生批評紅拂記』の原刊本と思われる版には、封面に容与堂主人の姓の手掛かりとなりうる記載が見える伝本があることが分かった。但し、現時点では主人の姓の特定にまでは至っていない。この点については「李卓吾先生批評」戯曲刊本の刊行状況をめぐって」(東方学会平成30年度秋季学術大会、2018年11月10日、芝蘭会館別館)という口頭発表で報告した上で、現在は論文にまとめるべく準備中である。また、この口頭発表においては、容与堂が刊行したと明記されていない「李卓吾先生批評」を銘打つ戯曲刊本についても考察を行い、容与堂の名が明記された小説1種を含む6種の刊本には全て複数の覆刻本があるのに対して、容与堂の名が明記されていない戯曲刊本はいずれも覆刻本が全く見つかっていないものであるという性格の違いを指摘した。

(3) 本研究課題のもうひとつの出発点であった金谿唐氏・金谿周氏の出版活動については、江西出身者が明代中期から清代にかけての商業出版界で出版業者としてもコンテンツ製作者(撰者ないし編者)としても幅広く活躍していたという従来あまり注目されていなかった視点から改めて掘り下げた口頭発表(上原究一「明末清初の坊刻における江西の位置付けについて」、東方学会平成29年度秋季学術大会 シンポジウム「中・朝・日三国坊刻本の出現とその展開」2017年11月13日)を行った上で、その成果を東方学会の英文誌にまとめた(UEHARA Kyuichi「On the Position of Chiang-hsi in Commercial Publishing in the Late Ming and Early Ch'ing」、『ACTA ASIATICA』No.116、2018)。また、本研究課題開始以前に執筆した上原究一「明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について」(『東方学』第131輯、2016)を中国語訳してドイツで開かれた国際学会において口頭発表を行い(上原究一「論明末商業出版界中異姓書坊間的跨地域合作關係之存在」、第2届世界漢学論壇&第17届中国古代小説戯曲文献暨數位化國際研討会、2018年8月18日、ウィッテン大学)、研究成果の国際的な発信にも努めた。

(4) また、明代後期の商業出版における地域性に関して、書坊の活動状況の側からの研究だけでなく、章回小説というコンテンツが分回形式を採るか分則本形式を採るかが年代的・地域的にどのように分布しているかについても検討を行い、口頭発表を行った上で(上原究一「明末における「章回」小説の定着と商業出版」、中国社会文化学会2017年度大会 シンポジウム「中国近世の出版と社会」、2017年7月9日、東京大学本郷キャンパス)論文にまとめた(上原究一「明末における「章回」小説の定着と商業出版(大会シンポジウム 中国近世の出版と社会)」、『中国：社会と文化』第33号、2018)。結論としては、明末の時点では蘇州や金陵といった江南地方においては白話文による長篇小説は分回本形式を採るものだという規範意識が定着しつつあった一方で、建陽ではどちらかという分則本形式の方が好まれるという、地表的な差異があった可能性が高いことが分かった。江南で分回本形式が規範化しつつあった時期にも建陽で分則本形式を出し続けていたのは、金陵の唐氏や周氏の書坊と提携を持っていた余氏の書坊にも当て嵌まるため、当時の書坊の間に地域を超えた広域的な提携関係があったからといって、地域ごとの独自性が失われたという訳ではないことが確かめられた。

(5) 2018年11月に開催された「平成29年度東京古典会古典籍展観大入札会」において、それまで中国国家図書館所蔵の1本のみしか伝存が知られていなかった、石渠閣補刻本『忠義水滸傳』百卷百回(第1冊補配)と思しき版本が出品された。石渠閣補刻本は康熙年間初期およびそれよりも後と思われる何段階かの補刻を経てはいるが、原刻部分は現存最古の百回本『水滸傳』の完本として尊重されてきた容与堂刊本『李卓吾先生批評忠義水滸傳』よりも刊行が早い可能性や、本文系統の上でも容与堂刊本よりも古い形を留めるものである可能性が指摘されていたものである。しかし、中国国家図書館蔵本は影印本が刊行されておらず、全冊の複写も許可されていなかったため、全容の把握が進んでいなかった。

その同版本と思しき上記入札会への出品本を研究者の調査が容易な環境に置くことが出来るように京都府立大学の小松謙氏らと協力して入札者を探したところ、京都大学の平田昌司氏が落札し、写真撮影と詳細な調査を許可して頂くことが出来た。この版本は当初の研究計画で予定していた調査対象ではなかったものの、これを精査することで容与堂刊本『李卓吾先生批評

『水滸傳』の『水滸伝』出版史上における位置づけを再考することが見込めることや、荒木達雄「石渠閣出版活動和『水滸傳』之補刻」(『漢學研究』第35卷第3期、2018)で句容蔣氏の書坊であることが示されていた石渠閣の出版活動の様相を掘り下げることも見込めることから、計画を見直して、本研究期間の後半にはこれについての研究に力を注ぐことにした。

中国国家図書館蔵本の原本調査も行った上で、最終的には荒木氏との共著論文として上原究一、荒木達雄「石渠閣補刻本『忠義水滸傳』の補刻の様相について」(『中国文学報』第91冊、2018)をまとめた。この論文では、平田氏蔵本は中国国家図書館蔵本と同版で、補刻葉も殆ど同じように入っているが、平田氏蔵本の方が印刷が若干早く、補刻が一段階だけ少ないことを明らかにした上で、両伝本の全ての葉について、原刻と見るべきか補刻と見るべきかと、補刻である葉についてはどの段階の補刻であるかの判断を示した。更に、1980年代以降の先行研究では否定的に見られることが多くなっていた、中国国家図書館蔵本では文字の右端のごく一部しか残っていない序末の署名(平田氏蔵本は残念ながら序自体が残っていない)が「萬曆己丑(17年)孟冬天都外臣叙」であるという説について、少なくとも上の4字が「萬曆己丑」なのは確かであろうとの見解も提示した。また、今後の検討課題として、先行研究では徽州刊本と看做されることが多かった原刻部分について、確かに徽州刊本である可能性は十分にあるものの、金陵刊本である可能性も考えられることを指摘した。

なお、石渠閣補刻本の本文の性格については、別に小松氏が小松謙「『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究」(『中国文学報』第91冊、2018)という論文で詳細に考察し、原刻部分は容与堂刊本よりも古い要素を留めていることや、補刻部分も原刻の文字を忠実に引き継いでいる可能性が高いことを指摘している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

UEHARA Kyuichi, On the Position of Chiang-hsi in Commercial Publishing in the Late Ming and Early Ch'ing, ACTA ASIATICA, 査読無, No.116, 2018, pp.21-41

上原究一、荒木達雄、石渠閣補刻本『忠義水滸傳』の補刻の様相について、中国文学報、査読無、91冊、2018、pp.58-111

上原究一、明末における「章回」小説の定着と商業出版(大会シンポジウム 中国近世の出版と社会)、中国：社会と文化、査読無、33号、2018、pp.22-43

上原究一、いわゆる舒載陽本『封神演義』の刊行者について、山梨大学国語・国文と国語教育、査読無、22号、2018、pp.40-54

〔学会発表〕(計7件)

上原究一、「李卓吾先生批評」戯曲刊本の刊行状況をめぐって、東方学会平成30年度秋季学術大会、招待講演、2018年11月10日、芝蘭会館別館(京都府京都市)

上原究一、章回小説と商業出版 百回本『西遊記』の成立と展開を軸に、東京大学東洋文化研究所2018年度第2回定例研究会、2018年9月13日、東京大学東洋文化研究所(東京都文京区)

上原究一、論明末商業出版界中異姓書坊間的跨地域合作關係之存在、第2届世界漢学論壇&第17届中国古代小説戯曲文献暨數位化國際研討会、國際学会、中国語、2018年8月18日、ウィッテン大学(ドイツ)

上原究一、明刊本《南北兩宋志傳》論析、第12届通俗文學與雅正文學「近現代文學與文化」國際學術研討會、招待講演、國際学会、中国語、2017年11月17日、国立中興大学(台湾)

上原究一、明末の小説・戯曲挿画の製作工程について、東文研シンポジウム「明末清初、都市と美術」、招待講演、國際学会、2017年11月13日、東京大学東洋文化研究所(東京都文京区)

上原究一、明末清初の坊刻における江西の位置付けについて、東方学会平成29年度秋季学術大会 シンポジウム「中・朝・日三国坊刻本の出現とその展開」、招待講演、國際学会、2017年11月13日、日本教育会館(東京都千代田区)

上原究一、明末における「章回」小説の定着と商業出版、中国社会文化学会2017年度大会 シンポジウム「中国近世の出版と社会」、招待講演、2017年7月9日、東京大学本郷キャンパス(東京都文京区)

〔図書〕(計2件)

解昆樺[主編] 上原究一、王萬睿、何寶藍、陳建源、陳碩文、黃雪蕾、解昆樺、楊傑銘、劉淑貞、蕭涵珍、謝瑞隆[著] 流動與對焦：東亞圖像與影像論、國立中興大學出版中心、2019、426(うち分担執筆単著論文「孫悟空穿什麼顏色的衣服? 小説文本和肖像造型之間」、pp.55-85)

中国古典小説研究会[編] 鈴木陽一、大塚秀高、黃霖、孫遜、大木康、岡崎由美、金文京、黃仕忠、廖可斌、李桂奎、趙維国、佐野誠子、許建平、上原究一、笠見弥生、陳文新、王三慶、後藤裕也、周力、宋莉華、上原徳子、金健人、竹内真彦、楼含松[著] 中国古典小説研究の未来 21世紀への回顧と展望、勉誠出版、2018、201(うち分担執筆単著論文「虎林

容与堂の小説・戯曲刊本とその覆刻本について」, pp.96-107)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。